

この人に聞く

播磨臨海工業地帯の海の玄関口・姫路港。工業港として多くの外国船が出入りし、地域の産業を支えている。この港を観光や地域活性化にも生かそうという取り組みが地元で進んでおり、09年からは豪華客船「ふじ丸」による姫路港発着の屋久島ツアーも始まった。取り組みの中心人物で、客船誘致や港のにぎわいづくりに力を入れている飾磨海運(姫路市)の水田裕一郎社長(45)に港の魅力や展望を聞いた。

【聞き手・久野洋】

地域活性化に港を生かす

◇姫路港は工業港。どうしてクルーズ客船誘致に着目したのですか。

◆約20年前に「ふじ丸」で船旅をしました。そのときの感動が忘れられず、かねてから姫路発の船旅を実現したいと考えていました。播磨地域で

は船旅が身近ではなく、ファンもほんの一部だけ。だからこそ船旅の魅力を広めたかったので

国内外の客船誘致に力を入れており、年間約100隻が寄港しています。でも姫路は、その十分の一以下です。だから実際に客船を目にする機会も少なく、船旅もあまり身近ではなかったのです。

◆はい。3週間足らずでチケットが完売し、驚きました。目的地の屋久島は人気があり、企画としては成功しやすいのですが、船旅は高価というイメージもありますが、屋久島までの交通費や宿泊費、食費を考えると他の交通手段と比べても、決して高くありません。

◇09年の屋久島ツアーも予約は好調です。今年8月に予定している2回目のツアーも予約は好調です。今年8月に予定している2回目のツアーも予約は好調です。

◆姫路港は重要な工業港で、多くの原材料や製品が輸出入されています。姫路港と何らかの関係があります。それを多くの市民に知ってもらうとともに、今後も貨物便を増やして地域の企業の利便性を高めることが大切です。それに加え、港のにぎわいもつくりたいのです。まちづくりや地域活性化の取り組みは市内にたくさんあります。港はこれらの団体と連携できます。例えば言葉や文化、国際交流の団体に客船の歓迎式典の場を提供できます。私自身、市民と港をつなげるような役割を担いたいと思っています。



飾磨海運(姫路市)
水田裕一郎社長

みずた・ゆういちろう 1964年、姫路市生まれ。京産大経営学部を卒業後、兵機海運(神戸市)に入社。その後、祖父が興した飾磨海運に入社し、港運部長などを経て06年から現職。貨物船や客船の誘致活動に熱心で、姫路港ポートセールス推進協議会の事務局課長なども務めている。

◇外国客船の寄港では地域にどんなメリットがありますか？

◆観光客が増えることで消費面での経済効果が期待できます。また、市民が港に集まるきっかけになり、港ににぎわいも生まれます。これまで客船の誘致に取り組むとともに、行政などに入港歓迎式典の開催を働きかけており、姫路観光コンベンションビューローなどが式典を開いています。他の港では郷土芸能の披露などがありますが、例えば外国人旅行者の名前を市民が書道で書いて贈ることも可能です。旅行者へのもてなしの心を醸成するとともに、市民が外国や他地域の方と交流する機会にもなります。